

【巻頭ご挨拶】猿の道か？猫の道か？

山下 江



山下 江（やました こう）
昭和二十七年江田島生まれ
弁護士十六名、中四国最大級の
山下江法律事務所 所長・弁護士
ブログ「なやみよまるく」更新中

私は「猿の道か？猫の道か？」という言葉が好きだ。これは、中世インドのヒンドゥー教の神学論争、さらには仏教の「自力か他力か」の論争に繋がる言葉である。人間は神によって救われるが、それに対し人間はどう対応すれば良いのが争点だ。

子猿は母猿に運ばれるときには、母猿にしっかりとしがみついている。他方、子猫は母猫に運ばれるとき、何もしないで、母猫が子猫の首をくわえて運んでいく。母猿・母猫は神、子猿・子猫は人間と想定されていて、子猿が「自力」、子猫が「他力」を体現しているという訳だ。

「自力」は「この一瞬、この今こそがあなたの生だ。この今を全力で生きよ(そうすれば救われる)」と説く。これに対し「他力」は「すべては仏の手のひらにある運命だから、過去をくよくよ悩んでもしょうがないし、未来に不安を持ってもしようがない(そうすれば救われる)」と説く。この対立だが、私には同じことを言っているように思えて

ならない。同じことを、「自力」は積極的表現方法で、「他力」は消極的表現方法で言っているに過ぎないのではと、考えるのである。

似たような考え方は、世界の宗教にも見ることが出来る。

キリスト教「新約聖書」では「明日のことを思わずらうな。明日のことは、明日自身が思いわで十分である」とある。また、イスラム教には「イン・シャー・アッラー」という言葉がある。翻訳すると「アッラーの御心ならば」という意味だ。例えば、待ち合わせに30分遅れたとする。遅れてきても「イン・シャー・アッラー」と言えば、待った人も遅れた人もこれで解決ということになる。古今東西、宗教は、人間の苦しみを解決してくれる、人間が考え出した一つの知恵ではないかと思う。

平成二十三年九月二十日



敬書 中川義和